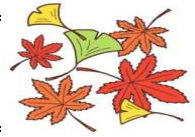




校長室だより

防府市立牟礼中学校
R2. 11. 2



「やさしさ」について～灰谷健次郎～

校長 田中 俊光

昭和の時代の児童文学者 灰谷健次郎は、小学校の教員経験があり、私が大学生だった38年前から好きな作家です。本「すべての怒りは水のごとくに」から、今でも印象に残っている場面があるので紹介します。今月号は、ちょっとハードですよ。

「きょうは“考える、勉強をします。考える勉強ですから、ノートをとったり、覚えたりする必要はありません。そのかわり、しっかり考えてください。なにについて考えるかというところ…」**小学四年生の教室**で、わたしはそう切り出した。黒板に『「やさしさ」について』と書いた。「人のやさしさについてです。はじめから、やさしさというのはむずかしいかもしれませんが、かわいがる、ということとで考えてみましょうか」。わたしは、人間の赤ちゃんをかわいがるのと、犬の赤ちゃんをかわいがるのは、いっしょだろうかと子どもたちに問うた。

子どもたちは活発に発言した。「人の赤ちゃんも犬の赤ちゃんも、いのちは同じで大事だから、いっしょと思う」ある子どもが、そう答えると、その子どもの建前をくずそうとする子が出てくる。「おまえ、そんなこというけどなア…もし、火事になったら、人の赤ちゃんも犬の赤ちゃんも、どっち先に連れて逃げるんや」いろいろな意見が出る。わたしは一つの答えを押しつけたり、なんらかの答えを導き出そうという気は毛頭ない。「じゃ、今、考えていることは、ちょっと横に置いて、きょうの勉強が終わってから、もう一度考えてみてください」。

わたしは、毎日の暮らしのなかで、やさしくされたり、人にやさしくした体験を話してほしい、と子どもたちにいった。「テストのとき、消しゴムがなくて困っていたら、〇〇君が、そっと貸してくれました。とても、うれしかった」そんな意見がうきうき出る。うれしかった、ああよかったと思った、人が好きになった、心が、お風呂のお湯みたいになった、歌をうたいたいような気になった、子どものいった通り、そんな形容の言葉をわたしは黒板に書いていった。

「じゃ、みなさんが考える、人のやさしさというのは、こういう気持ちを起こさせるような行いだと、とらえていいんですね。子どもたちは、はい、といった。そこでわたしは「チューインガム一つ」の万引の詩を、子どもたちの前で読んだのである。

<p>チューインガム一つ 小学3年</p> <p>せんせい おこらんとって せんせい おこらんとってね わたし ものすごくわるいことした</p> <p>わたし おみせやさんの チューインガムとってん 一年生の子とふたりで チューインガムとってしもてん すぐ みつかってしもた きつと 神さんが おばさんにしらせたんや わたし ものもいわれへん からだか おもちゃみたいに カタカタふるえるねん わたしが一年生の子に 「とり」いうてん 一年生の子が 「あんたもとり」いうたけど わたしはみつかったらいややから いややいうた</p>	<p>一年生の子がとった</p> <p>でも わたしがわるい この子の百ばいも千ばいもわるい わるい わるい わるい わたしがわるい おかあちゃんに みつからへんとおもったのに やっぱり すぐ みつかった あんなこわいおかあちゃんのかお 見たことない あんなかなしそうなおかあちゃん のかお見たことない しぬくらいたかかれて 「こんな子 うちの子とちがう 出ていき」 おかあちゃんはなきながら そないいうねん わたし ひとりで出ていってん</p>	<p>いつでもいくこうえんにいったら よその国へいったみたいないな気がし たよ せんせい</p> <p>どこかへ いってしまお とおもた でも なんぼあるいても どこへもいくとこあらへん なんぼ かんがえても あしばっかりふるえて なんにも かんがえられへん おそうに うちへかえって さかなみたいにおかあちゃんに あやまってん</p> <p>けど おかあちゃんは わたしかおを見て ないてばか りいる</p> <p>わたしは どうして あんなわるいことをしてんやろ</p> <p>もう二日もたっているのに おかあちゃんは まだ さみしそうにないている せんせい どないしょう</p>
---	---	--

「チューインガム一つ」の詩を、子どもたちは真剣な表情で聞いていた。読み終えて、わたしはいった。「この詩を、この子に書かせた先生は、やさしい人だといえますか。どうですか？」

だれも手を挙げない。子どもたちは考えこんでいる。目が光り、じょじょに深い表情しきくに変わっていく。後に、このときの子どもの写真を見たが、明らかに変化が生じ、子どもたちは深い思索に入っていることが分かるのである。「どうですか。どう思いますか」わたしは強い調子で何度もたずねた。沈黙は続く。「どうなんですか」

ひとりの女の子が、おずおずといった感じで手を挙げた。「…わたしは…その先生は…やさしい人だと…思う…」考え考え、たどたどしく答えた。彼女の発言に、ほっとしたような空気が流れ、わたしもそう思う、ぼくもそう思う、という声が、あちこちで上がる。

「それはおかしいじゃないですか。あなた方は、ついさっき、人のやさしさというのは、ああ、よかったとか、心があつたかくなるような気持ちを起こさせるような行いだといったばかりじゃないですか」。ふたたび子どもたちは考えこみ、沈黙が支配した。どこがやさしいのですか、とわたしが強くとずねたときだ。「…きびしいから」思わず言葉が出たというふうに答えた子がいた。「きびしい？ きびしいことがやさしさだとあなたはいうんですか。人のやさしさは、あるときにはきびしいことだと、あなたは今、考えた。そうとらえていいわけ？」

その子は、はい、と真っすぐわたしゆるの目を見て答えた。ぼくもそう思う…わたしも…そんな声が上がりが、はじめて子どもたちの表情が緩んだ。この間、子どもたちはすごい緊張と集中のなかにあった。もちろん、やさしさを考える授業は、さらに続くのであるが、自ら考えなくては、答えはどこにもないという思いは、このとき、どの子も抱いだいたようである。

（「すべての怒りは水のごとくに」灰谷健次郎 角川文庫）

次の詩も「すべての怒りは水のごとくに」にあるものです。私の人生60年間に読んだ詩の中で、一番切ない詩です。

ぼくだけほっとかれたんや	小学1年	おにいちゃんだけケンタッキーへ
がっこうからうちへかえったら		つれていって
だれもおれへんねん		フライドチキンたべさせるねん
あたらしいおとうちゃんも		ぼく つれていってくれへん
ぼくのおかあちゃんもにいちゃんも		ぼく あかちゃんようあそんだったんやで
それにあかちゃんも		だっこもしたった
みんなでていってしもうたんや		おんぶもしたったんや
あかちゃんのおしめやら		ぼくのかおみたら
おかあちゃんのおふくやら		じっきにわらうねんで
うちのにもつがなんにもあれへん		よみせでこうたカウンタックのおもちや
ぼくだけほってひっこしてしもうたんや		みせたらくれくれいうねん
ぼくだけほっとかれたんや		てにもたしたらくちに入れるねん
ばんにおばあちゃんがかえってきた		あかんいうてとりあげたら
おじいちゃんもかえってきた		わあーんいうてなくねんで
おかあちゃんが		きのうな
「たかしだけおいとく」		ひるごはんのひやくえんもうたやつもって
とおばあちゃんにいうてでていったんやって		こうベデパートへあるいていったんや
おかあちゃんがふくしからでたおかね		パンかわんと
みんなもっていってしもうた		こうてつジークのもけいこうてん
そやからぼくのきゅうしよくのおかね		おなかすいたけどな
はらわれへんいうて		こんどあかちゃんがかえってきたら
おばあちゃんないとな		おもちやもたしたんねん
おじいちゃんもおこった		てにもってあるかしたるかおもとんねん
あたらしいおとうちゃん		はよかえってけえへんかな
いっこもかわいがってくれへん		かえってきたらええのにな
		（「すべての怒りは水のごとくに」灰谷健次郎 角川文庫）